児童生徒を支援する力を高める「校内研修実践資料」の作成
－校種間の接続期における児童生徒の不適応問題の解決をめざして－

長期研究員　遠 藤　寛 之

Ⅰ　研究の趣旨

本県の中学校第１学年の不登校者数は，小学校第６学年の不登校者数の約3.6倍であり，中１ギャップの解消が生徒指導上の課題の一つとなっている(平成24年度福島県教育委員会)。中１ギャップについて文部科学省は，原因は中学校だけにあるのではなく，小学校から中学校への接続に課題があるとしている。

ほかにも，小学校入学後に落ち着いて授業を受けられないといった小１プロブレム，高等学校第１学年時に不登校や中途退学に陥りやすいといった高１クライシスなどの問題についても，中１ギャップと同様に，校種間の接続に課題があると考えられる。そこで，「教員が各校種の教員と一緒に児童生徒の発達をつなぐ※1」という視点を持つことができれば，校種間の接続期における児童生徒の不適応問題への予防・解決的な手だての一つになると考えた。

本研究では，本教育センター・教育相談チーム研究（本稿P.19～30参照）の一環として，校内研修に活用できる，児童生徒の発達をつなぐ校内研修実践資料を開発することとした。そして，以下の研究仮説のもと，校種間の接続期の児童生徒の不適応問題の解決をめざす。

※１　一人の子どもの発達は連続的なものであり，継続的な支援が必要であるということ。

Ⅱ　研究の概要

１　研究仮説

校種間の接続期における児童生徒の不適応問題への解決に向けて，校内研修実践資料「児童生徒の発達をつなぐ－発達課題，校種間連携の理解を通して－」（以下，資料）を活用した研修を行えば，教員は児童生徒の発達をつなぐという視点を持ち，児童生徒理解の深化と校種間連携への意識化が図られるだろう。

２　研究の内容と実際

⑴　資料構成・内容

各校種の教員が児童生徒の発達をつなぐ視点の必要性を理解できるようにするため，以下の①，②の研修内容で，段階的に理解が深まる資料を構成した。

①　発達課題の視点に立つ研修内容

・　児童生徒の心理・社会的な発達課題※2の説明

・　児童生徒の問題行動を発達課題の視点からとらえ，発達を支援するための具体策を考える演習

※２　各発達段階で達成しておかなければならない課題のこと

②　校種間連携の視点に立つ研修内容

・　校種間の接続期の問題とその原因の説明

・　校種間で児童生徒の発達をつなぐための具体策を考える演習

⑵　研修の実際

①　**研修対象**　研究協力校中学校区の小・中学校教員と近隣の高等学校教員

（小学校８名・中学校15名・高等学校２名）

②　発達課題の視点に立つ研修の実際

具体策の検討

まず，乳児期から青年期における心理・社会的な発達課題の説明を行った。演習では，児童生徒の問題行動の原因を発達課題の視点からとらえ，児童生徒の発達を支援していくための具体策を，研修者同士で検討した。「幼児期の主導性が未発達なので，その子を認めていく支援が必要ではないか」「児童期の勤勉性が未発達なので，スモールステップで指導し，少しずつ達成感を味わわせていく必要があるのではないか」などの意見が出た。

③　校種間連携の視点に立つ研修の実際

まず，校種間の接続期に起きている問題とその原

因の説明を行った。演習では，教員一人一人が，校種間で児童生徒の発達をつなぐための具体策を書き出し，全体で協議した。「異なる校種の授業を参観し，子どもの発達に合わせてどのように授業をしているのかを知る」「小学生に中間テストの形式を体験させ，中学校生活の雰囲気を味わわせる」などといった意見が出た。異なる校種の教員と意見を交わすことで，校種間で連携しようという意欲の高まりが見られ，校種間連携の行動化への第一歩となった。

Ⅲ　研究のまとめ

１　「直後アンケート」による検証

研修直後に，小・中・高の教員に，５件法による「直後アンケート」を実施した。

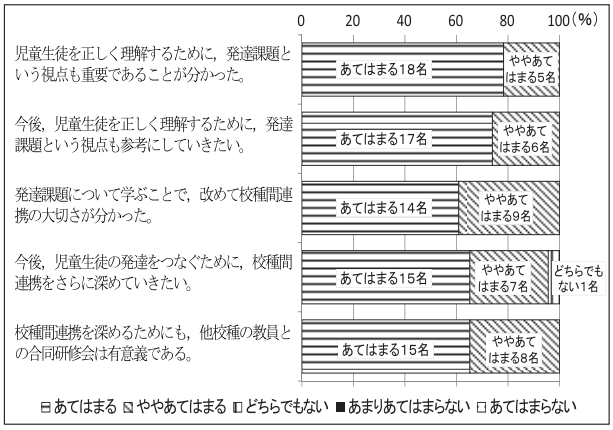

図１　「直後アンケート」結果

〔研修者の感想〕

・　乳児期までさかのぼって発達課題について研修できたことは大変有意義だった。（小学校教員）

・　小中連携の視点はあったが，中高連携の視点も持つようにしたい。（中学校教員）

・　他の校種の教員も，情報交換などの連携が大切だと認識していることが分かった。（高等学校教員）

発達課題という視点の重要性と，児童生徒の発達をつなぐための校種間連携の必要性について，理解と意識の高まりが見られた（**図１**）。

２　「事前・事後アンケート」による検証

研究協力校の中学校教員（15名）には，研修１か月後の12月に「事後アンケート」を実施し，研修前の５月の「事前アンケート」と比較した。調査は，「５：あてはまる～１：あてはまらない」の５件法により実施した。また，「事後アンケート」では研修後の実践について，記述式での回答も得た。

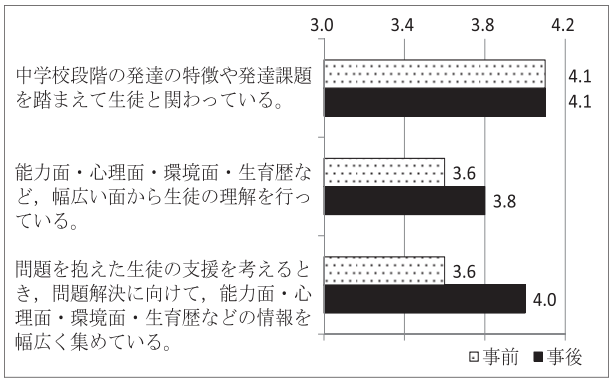

図２　「事前・事後アンケート」結果

〔研修者の回答〕

・　生徒の問題を考えるときに，発達課題の面からも考えるようになった。

・　小学生だった頃の様子を生徒自身から聞き取り，その生徒の成長を把握することで，生徒への対応，指導，支援に生かしている。

研究協力校は，発達課題を踏まえて生徒と関わる意識が元々高く，研修前後で数値の変容はあまり見られなかった（**図２**）。しかし，記述回答からは，発達課題や生育歴などの多面的な視点で生徒をより正しく理解し，支援しようという具体的な取り組みが多数見られた。

３　成果と課題

⑴　研究の成果

①　資料を活用した研修により，研修者は児童生徒の発達をつなぐという視点の重要性を理解し，校種間で連携する意識が高まった。

②　校種混合型で研修することで，校種間連携への意識がさらに高まり，より効果的であった。

⑵　今後の課題

今後は，さらに校種間の接続期の問題と解決策についての研究を深め，教員の児童生徒を支援する力が高まる校内研修実践資料の開発を進めていきたい。

＊　本研究で作成した校内研修実践資料は，教育センターWebサイト（http://www.center.fks.ed.jp/）に掲載してあるので活用していただきたい。